

消 息

山本哲三先生をお送りするにあたって

山本哲三先生のご退職にあたり、商学部教員を代表してご挨拶させていただきます。

山本先生は、1970年に早稲田大学第一商学部をご卒業後、北海道大学大学院修士課程・博士後期課程に進学され、筑波大学社会学系研究員を経て1987年に商学部に着任されました。その後、1983年に筑波大学より経済学博士の学位を取得されています。

役職としては、公共事業学会理事、内閣府物価安定政策会議副座長をはじめとして内閣府市場開放委員会、国交省鉄道運賃検討委員会、総務省 IT 競争部会、公正取引委員会競争政策研究会等の委員を歴任されました。また OECD コンサルタントをお務めになったほか、早稲田大学総合研究機構プロジェクト研究所水循環システム研究所長をお務めになられました。

研究業績としては、23冊の著書・翻訳書等のほか、数多くの論文、学会発表等を発表されています。特筆すべき点としては、学界における研究発表に留まらず、積極的にジャーナリズム、マスコミにおいても発信されていることです。これは、先生のご専門が、公共政策とくに「政府と市場の関係に関する経済学的分析」であったことと表裏をなしていると思います。業績一覧をみればわかるとおり、先生は、規制緩和の立場から、政府と市場の関係について発言されてきました。山本先生のご研究に関する専門的な説明は、高瀬先生の消息に委ねるとして、ここでは、先生の最新のご研究の一端を披露したいと思います。

先生は、つい先ごろ、V.クリシュナ (Vijay Krishna) 著『オークション理論』(“Auction theory”)の翻訳書を刊行されました。この本は、近年、民営化・規制緩和のための新しい手法として注目されている「オークション」に関する理論的な主要課題を論じるとともに、それらの数理的証明を集めた当該分野における必読書とみなされています。オークションとは、アンティーク等の物財の販売方式として一般には知られていますが、民営化・規制緩和の際にも利用されるようになっていきます。最も有名な例は、

先進国で実施された電波周波数の競売（オークション）といわれます。もっとも、オークションによる民営化が、常に最適な資源配分を実現できるわけではないことも経験的に明らかになっています。それゆえに、どのような制度設計を行えば、オークションによる民営化が社会的厚生に資するかという研究は、大きな社会的意義を有しています。そうした、極めて公共性の高い研究内容を有するのが、先生が翻訳された著作です。

オークションは、近年日本でも、少数ながら実施されている「コンセッション」にも利用可能です。山本先生は、上下水道事業におけるコンセッションの可能性を検討するために、本学に水循環システム研究所を設立されましたが、こうした活動を通して、「学の活用」という早稲田の教旨を実践されてきたといえます。

教育者としての先生がどのような存在であったかは、残念ながらあまり知る術がなかったのですが、類推するに、学生の問題意識と自主性を尊重する教育、議論を誘発する教育を実施されてきたのではないかと思います。

私的な事柄になりますが、博士論文を単著として刊行した直後、学部運営委員会での雑談の折、近頃、専門書は売れないという話題になりました。その際、山本先生から「藤田君、大丈夫だよ。2刷はいくよ」と励まされました。残念ながら、その本は2刷には至りませんでした。幸いにその本で学会賞を受賞することができました。そうした意味では、私にとって山本先生は福の神的な存在であるといえます。

早稲田大学の規程に沿って、山本先生は、この3月をもって早稲田大学の教壇を去られますが、研究者としての人生に定年はありません。先生のこれまでの早稲田大学とくに商学部に対するご貢献に深甚なる感謝の意を表するとともに、健康を回復され、今後とも研究などの活動に従事できることを祈念して、私の送別の辞とさせていただきます。

早稲田商学同攻会長

藤田 誠